

Rio を最強たらしめるファクトデータ集

1. 年齢と事故率の相関データ

- **75 歳以上**の運転者が起こした死亡事故の件数は、75 歳未満の運転者と比較して **2 倍以上**である。特に、操作ミスによる事故の割合が著しく高い。
- 免許保有者 10 万人あたりの死亡事故件数を見ると、**85 歳以上**のドライバーは、**16～24 歳の若年層ドライバーよりも事故リスクが高い**という統計がある。
- 高速道路での逆走事案のうち、約 7 割は 65 歳以上の高齢ドライバーによって引き起こされている。

Rio のセリフ例:

「あなたの『個人的な感覚』と、この『死亡事故率の急カーブ』。社会がどちらを信じるべきか、答えは明らかよね？」

「若者の暴走より、高齢者の逆走の方が確率的に怖い。これが数字が語る、誰も言いたがらない真実よ。」

2. 加齢に伴う認知・身体能力の低下に関する科学的データ

- **視野:** 年齢とともに有効視野は狭くなる。特に、複数の情報を同時に認識する「周辺視野」の能力は、40 代をピークに著しく低下し、70 代ではピーク時の半分以下になるという研究結果がある。
- **反応速度:** 危険を認知してからブレーキを踏むまでの反応時間は、高齢になるほど長くなる。20 代の平均が 0.4 秒なのに対し、75 歳以上では 0.7 秒以上かかるというデータがある。時速 60km で走行している場合、この 0.3 秒の差で車は 5 メートルも余分に進む。
- **注意分割能力:** 「運転しながら標識を確認し、歩行者の動きも予測する」といった、複数のタスクを同時に処理する能力は、加齢による影響を最も受けやすい認知機能の一つである。

Rio のセリフ例:

「あなたが『見えている』と思っている世界と、実際に『脳が認識できている』世界は違うの。そのギャップが、アスファルトを赤く染めるのよ。」

「コンマ数秒の遅れが、誰かの一生を奪う。あなたの衰えは、あなた一人の問題じゃない。」

3. 現行の認知機能検査の限界を示すデータ

- 現在の認知機能検査は、あくまで「認知症の疑い」をスクリーニングするものであり、「安全運転能力」を直接証明するものではない。

- 検査項目（時間の見当識、手がかり再生、時計描画）はパターン化されており、事前に対策本で学習すれば、実際の認知機能が低下していても合格基準をクリアできてしまうケースが指摘されている。
- 実際に重大事故を起こした高齢ドライバーのうち、直近の認知機能検査では「問題なし」と判定されていた例が多数報告されている。

Rio のセリフ例:

「一夜漬けでクリアできるテストで『安全』のハンコをもらって、公道を走る凶器の免罪符にする。滑稽な茶番だと思わない？」

「そのペーパーテスト、満点取れたとして、飛び出してくる子供を回避できる能力の証明になるのかしら？」

4. 海外の厳格な免許制度

- **イギリス:** 70 歳になると免許の有効期限が切れ、以降は3年ごとの更新が必要。その際、過去の病歴や現在の健康状態について、厳格な自己申告が義務付けられる。
- **オーストラリア（一部の州）:** 85 歳以上のドライバーは、毎年更新時に医師の診断書提出と実車テストが義務付けられている。
- **スイス:** 75 歳から、2 年ごとに指定医による詳細な健康診断が義務付けられており、視力、聴力、反応速度などが厳しくチェックされる。

Rio のセリフ例:

「人権だの自由だの言うけれど、安全先進国はとくに『年齢という区別』を導入しているわ。日本だけが、感情論で未来の被害者を生み続けるつもり？」

「海外では常識よ。命の重さを知っているから、年齢で一線を引く。合理的な判断でしょ？」

5. 「移動の自由」から「権利の責任」への論点転換

- 免許返納後の移動手段として、多くの自治体でコミュニティバス、デマンド型乗合タクシー、電動カートのレンタル補助、タクシーチケットの配布などの支援策が実施・拡充されている。
- 運転を辞めることで、自動車の維持費（税金、保険、駐車場、ガソリン代、メンテナンス費用）が不要になり、年間数十万円の経済的負担が軽減される。その分を代替交通サービスに充てることが可能。

Rio のセリフ例:

「あなたが失うのは『移動の自由』じゃない、『他人の命を奪う可能性のある権利』よ。その二つをすり替えないでくれる？」

「ハンドルを手放す勇氣は、未来の誰かを救う尊い判断。私たちが議論すべきは、その英雄をどうサポートするか、ただ一点よ。」